

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 5



令和7年5月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第5号

No.804

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 五月号 (通巻八〇四号)

◇今月の二十首詠……それぞれの日 伊東ミイ子 2

■作品 [A] 牧 雄彦・三木まり他 4

A 松井みね他 18

B 丸山哲史他 42

C 松村容子他 54

A 川辺京子他 66

■オリブ集 阿藤たつる・安部 律他 34

◇今月の二人 篠原優沙・石田和子 14

私と短歌との出会い (273) 松井春枝 17

■中山真弓歌集『空色のママチャリ』批評 田土才恵 28

温かさに包まれて 玉井綾子

理想的な母親像

■〈第一歌集を読む〉26 滝田靖子 32

鈴木文子歌集『西窓の彼方』

―夕映えの向こう―

■遊覧寄港〈図書館が私の居場所だった〉 岩野美代子 40

■歌壇月旦 西堤啓子 41

ありがとう歌

■三月号作品批評 58

A……………檜垣美保子・色井静代

箕浦 勤・玉井綾子

B……………設楽まゆみ・菊地栄子

C……………三浦好博

オリブ集……………市原やよひ

酒井治子・佐藤光正 53

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より [編集部] 77

第71回地中海全国大会(大津大会)のご案内 78

クリップ……………79 [特集] 原稿募集案内……………80

神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

それぞれの日日

伊東ミイ子

目もと優し七段飾りのお雛様母買いくれし安生^{あんじょう}人形

人形の町岩槻に生まれたる雛十五体わが子を祝う

雛段の上に届かぬ身の丈で飾りしときの子の小ささよ

春の陽はしずかに毛氈かけあがり頬ほんのりと桜色めく

五十年飾り続けしお雛さま夫入院し去年は飾れず

令和七年今年最後の雛飾り部屋いっばいに雛をあそぼす

ひな飾り終えて記念の家族写真今年は夫の絵姿を抱く

恙なく過ぎし日日のありがたき3・11の難をも逃れ

一九四七年生まれ
一九八八年「地中海」入社
福島支社所属
歌集に「やわらかな城」がある

夫の靴三足そろえ並べたり大きな靴が吾の守り神

冬空にたちまち凍るワイシャツが肩怒らせてうっふんうっふん

パイパスの上空太き雲流る上りの車列をひっぱるように

冬晴れの明るき部屋に車検待つ寺山修司の歌集読みつつ

マッチ擦り伽羅のお香を二本焚く寒がりだったあなたのために

雪降れば向こう三軒両隣り仲良く分け合い雪かきをする

税申告はじめて受ける寡婦控除不意にさみしさ込みあげて来る

寡婦という響き哀しき税申告螺子緩みたるようなカフ、カフ

自らの病と闘うただ中に氣遣い、励ましくくる友あり

御殿場と郡山との「今日の天気」確かめながら会話の弾む

友は富士山に吾は安達太良山を支えとし共に乗り越え来たる日日

ふる里を離れて早やも六ヶ月友との再会ひたすらに待つ

作品 A

牧 雄彦

鯛焼き

・大

寒風にふるへる枇杷の枝先に毛皮を着たるやあまた雷は
きさらぎの朝の日受けて枇杷の木の雷もこもこ膨らんでゐる
午前九時駅前カフェの窓越しに見てゐる多くの急ぎゆく人
マスクしてダウンコートのポケットに手を入れをみなが俯きてゆく
駅前のカフェで朝のコーヒーを飲む賢沢を老いて知るなり
小雪舞ふ駅前マルシェの屋台にて孫とほくほくの鯛焼きを食ふ
鯛焼きに一息ついてさあ行くか日の差し初むるマルシェの道を

三木 まり

寒

・昂

十六歳の葬送の列あせ道を言葉なく行く雪降りしきる
亡き友の葬送の列の最後尾 手袋の手を繋いで歩く
葬送の帰り道にふり仰ぐ蒼く輝く寒の昂よ
寒の星ふり仰ぎ見れば葬送の涙こぼれず喉に落ちゆく
葬送の列を追い越す木枯しにコートの際を押さえつつ行く
傷ついたレコードのように繰り返す旋律は蒼く胸に沈む
西に住む人はいつもわが胸のここにおいて静かな言葉を紡ぐ

松浦 禎子

心音

・羊

医師の持つ聴診器の中を流れているわが心音はまだ生きていて
五百年の樹齢をほこる大銀杏幹に寄りきてことばを交わす
ふと気付く冬の櫓の一輪が真正面よりわれを見つめる
銀杏の幹の曲線に心よせ薬師寺園の山門を過ぐ
子の家の愛犬に会う一日を折ふしおもわずらうごとく
泥水の上をかすかに波立たせわが足元をすきてゆくなり
それとなく櫓の花びら散りゆくを背丈の高き人のうしろに

松本多摩子

曲り角

・桜

人生に幾度もありぬ曲り角遊びし道を踏みしめ歩く
老いたれば維持は出来ぬと天切られ亡夫植えし木々寒空に立つ
この街で住みこの家で五十年氏神さまの梅の香やさし
大寒波やってくるらし洗濯を干す手も凍るせとうちの朝
あほなことやってもうたと思うこと増えて何度も牛乳零す
声に出すその一言が縁となりハイクとランチ佳き日となりぬ
人生の決断ありて寂しさも夢見る未来も職退きでいざ

三浦好博

シルクの光

・鈍

いち早く河津桜を咲かせつつ丘にシルクの光が満ちる
海原を屏風ヶ浦を我が顔を染めて弥生の夕陽が沈む
人氣ある岬のパン屋に寄る我は散歩の途上の匂ひどろばう
水仙は微笑みの色海見ゆる公園斜面一杯の笑み
忽然とひとは姿を消すものよ長患ひより良いではないか
終末に時計近づく人類が減びる時に地球は恢復
啄木に君はなれない才能もウーン野放図すら不足する

宮本靖彦

冬から春へ

・凌

大雪のテレビ眺めて我が庭の薄氷踏む体操の辛
寒風を耐へてチューリップ畑の草を抜く程なく芽生え古家飾らむ
株欄のベージめくれば歌舞妓欄いづれも同じ読みに泣かざる
五十年ぶり「幸助餅」の芝居観て歳枯れの涙はつか流しぬ
雲一つなき青空に二月の早春の風ひようと吹き抜く
遂に春 冷寒去りて暖かき日差しの中に手袋を脱ぐ
春ジャンパー着初めて出ればポケットに去年思案の歌の残れる

三好聖三

月

・伊

硝子戸を隔てて猿と向き合えばその獣性をやはり恐れる
客人とともに渡れば大室の山辺に初の雪は降りたり
わたしのことがもう判らないのよ友の妻君はたおやかに言う
夜の明けにしたがい色は薄れゆくシャムシール様の真南の月
自死をせぬほどの〈頭のやわらかさ〉己のものとなっただろうか
眼鏡して栗鼠が遠くを視ていると時には〈嘘〉を楽しみながら
夜明けまでさあ踊りましようとしなやかに繰り人形の少女が歌う

御代田澄江

日立紅寒桜

・茨

部屋に射す光に当たり書を読みぬ昼頃通る雪雲暗し
日立紅寒桜冬咲く新品種わが街のささやかな喜びとなる
薄日差す頃とはなりぬ節分の支度に間あり友の便り読む
「心込めし長き介護も悔い残る」友は夫君を送りて半年
眠りしまの十二年とふ夫君便りに籠もる深き悲しみ
明けて今日われの誕生日八十七歳驚き怖るるばかりの歳ぞ
子等よりの祝ひも届き亡夫に告ぐあなたの分を生きてゆきます
もとむらしげと

ポツンと一軒家

・そ

卒寿過ぎて沢水を引き一人住む山の一軒家の穏やかな顔
山奥の一軒家にて饗されるイワナの塩焼き山菜ごはん
「一軒家」見終えて妻と語り合う何が豊かな暮らしなのかと
幸せに定義はいらぬ不自由を楽しむ自由山家の暮らし
山奥の暮らしに慣れるとゲスト言うWiFiあればと付け加えつつ
来し方を悔いすることなしポケットをチョークで汚しわが日は過ぐ
最後までチョークを持ちて授業する日日こそよけれわが人生は

桃原佳子

寒波

・沖

朝空に道のあるらし鳥たちは隊列崩さず西空急ぐ
咲き遅れし水仙の花の綻びぬ二月の月光しら白照らす
耕されし田の面に群れる緋鳥鴨鴨冬の疾風にたじろがずおり
雨の朝も雪降る日にも色の冴えほっこりほっこりとヒオラの咲けり
居座りし寒波に町は雪景色見事なれども困りものかな
手の小指痛めて知れりそれぞれの指の存在意義の深さを
手紙なら何処でも行ける遠く住む友宛てに書くハガキ一枚

山下雅子

おむすび

・習

令和の世に思いもよらぬ米騒動なんと犯人は旨きおむすび
あまりにもおむすび旨し米米米の受難のごとき米騒動よ
ひさびさのカレーは旨し海軍カレー称えし学徒兵の夫をしのびぬ
同い齡の義弟の発病手術の報せ思いもよらぬ成りゆきを聞く
回復を電話やメールに祈るのみ妹の体力の限界思う
ちらちらと雪舞う今日はひなまつり七段雛にあられ香りき
わくわくし雛に近寄りお道具に遊びし節句のあの充実よ

山野幸司

田

・沖

水が濁れポンプもいかれ田に草は伸び放題よわが手回らず
時重ね百姓仕事まなぬ自然の御手に田も畑もある
土手の木を切る音鶴の群れをなし空舞い上がる背に染まりて
憧れの桃紅展に触れ合えば我はなりたり墨色人に
遺影なる篠田桃紅和服なり一本の線宙に舞い立つ
銀箔に金箔重ね墨踊り桃紅色に心が染まる
墨色の変幻自在キャンパスに今日の心を重ねて遊ぶ

山本

孟

大阪長屋

・大

二階建・緑側・前栽しつらへて瘦せ松一本ひよろひよろと立つ
日本間のどこから隙間風に冷ゆ火鉢の炭火手にやはらかし
やぐら炬燵豆炭二つのぬくもりに新聞読めば目蓋や落つる
婚礼具母の和簾筒宿替へのたびに傷みのいくつかかぞふ
床の間の掛軸替へる今年の絵父の自筆の達磨の睨み
卓袱台の円に座布団を六つ敷き闇米一膳いただく夕食
居間はすぐ布団を敷きつめ寝室に 布団の出し入れ嫁さんの仕事

養学登志子

金管楽器

・凌

昨日今日春の兆しのありながらみがきぬかれしような月かげ
唄いくつかわゆく惚けほがらかにわが頬をなで頬すりよせて
美容院素手にて洗髪されるととき心地のよさはありがとうの倍
あこがれのひと艶やかに年のゆき賀状三枚小鳥のカードと
病床の伯母はどなたもよし子さん息子も娘も嫁のよし子さん
金管楽器五本の指の美しリズム真紅のマニキュアきららかがやく
指揮棒を大きく振りて大きく口パッパッパと楽器さながら

横田敏子

富士の山

・福

頬を打つ冷たき風の吹くひと日富士は虚空にどっしりと立つ
流れゆく雲の間に顔を出す今日の富士なり風吹き荒ぶ
澄み切った空に突然アドバルーン 風に乗りつつ富士の麓へ
思わざる速さに飛びゆくアドバルーン「そこから見える富士はどうだい？」
五合目にブルーグレーの雲まとい真白き富士は貴婦人のごと
富士の山晴れて曇りて落ちつつかず今年二度目の寒波の最中
暮れなずむ茜の色に染まりつつ富士は特大シルエットとなる

磯田ひさ子

荒行

・森

山焼きの旅はコロナにはばまれて夫は見ぬまま逝きてしまひぬ
さびしさに耐へらるるかと旅に出づみづから荒行のごときを課して
かたはらに人亡き春をひとり来て若草山の山焼きを見る
山裾をとり囲みたる消防士さながら北面の武士を思はず
山焼きの炎ひろごりめらめらと神のごときが渡りゆきたり
燃え盛る火をもて淨む山焼きに土くろぐろと廻りゆく
生き変はりまた生き変はり土深く虫もたましひも淨まるならむ

市原やよひ

鴨川

・萬

鴨川に集いたる人「地中海」幼き二人伴い行けり
前列に並びて子供は十人余記念写真に若き顔顔
子供達遊ばせくるる輪の中に師の姿あり海は光りて
鴨川は記憶に無しと還暦を迎えたる子は迷う事なく
還暦の子を祝すれば横顔にふわりと夫の舞い降りており
夫逝きて月日は疾く過ぎ行けど一日一日に老いを刻みて
年老いた一人住まいの新人は今日も食料買い過ぎており

梅本武義

運勢

・羊

凍て雲の切れ間の青空行く機影見付けし今日の運勢は吉
前立腺治療の効果感じつつ冬の夜長の眠りに落ちる
大雪に苦勞の地見おり山陽に生まれ離れず老いをしめじみ
我にある祖母の思い出幼子と淡き日差しに探る路の暈
米寿にてデイスービスへ行くを見る隣家の主は七歳違い
戦争を終結さすの豪語への不安の中トランプ外交
ジェノサイド受け来し国のことか非難の世論沸かそう日本に

大浪美雪

つめたきがよし

・森

枕辺の雪積むやうな冷たさに覚むるも暁闇夜明けを待たん
寒中のカラスノエンドウ細きつるロゼッタ状に五寸ほど延ぶ
青き空映せる水際の自が影に見惚れてをるや青鷺一羽
ラジオ体操に腕を大きく回すとき冷えた大気のまっはりてきぬ
節分に踏切閉ざすの知らせあり追はれたる鬼いづこへゆかむ
白梅は寒のさ中に開き初め立春の今日目白あそぼす
しもつかれ春は名のみ冬の冬中小鉢一杯つめたきがよし

奥田陽子

風の中

・羊

こまやかに震えていたり岸の辺の青み帯び来し草の葉の群
《寒いさむい》それが合図であつたのか崩れるごとく夫うずくまる
牙えわたり眠れざる夜の明け近く聞き得ぬ声をさがしいる耳
冬のさくら開きそめたるほの明り差したる方へ思い寄りゆく
笛のように風の鳴る夜を目覚めいてまたたしめるひとりなる事
いちご三つ食べたる父を喜びて娘は帰るゆく風の吹く駅
駅頭に子を見送りてたたずめばただひとりなる身に受くる風

小野雅子

雪道

・羊

豪雪のニュースに浮かぶ八十年前の石打 学童疎開
階段を下つてゆけば玄関があり雪深き宿舎に着きぬ
雪の上に道あり藁沓で歩きお寺へ行きぬ列を作りて
お寺にも疎開児のクラス 集合しお話をきく雪道を行つて
雪解けて現れし道 こんなにもお寺は遠かつたのかと思ふ
この雪を昔の人は受け入れて例年のことと長く暮らし来し
雪解ける季節となりて宿の裏の小川でありし水音たかし

神田鈴子

大事故

・大

思はざる陥没事故に巻き込まれ地下に埋もれし人いま如何に
難渋の救助作業の続く日をただ待つのみ家族の思ひは
おそらくは眠れぬ夜を過ごししむ無力のわれは胸痛むのみ
大事故の辛きニュースの続く日にトランプ大統領の不敵な笑ひ
咲き満ちてくれぬ映ゆるさざんくわの花びら散らす木枯しが吹く
沈丁花の苔はややにふくらみて春の近きを告げるあした
うつすらとつもりし雪のすがすがし朝日に光る白銀の屋根

上林節江

北帰行

・ 湾

天に地に満ちるさわめき北空をしきりに見つむ雁も鵠も
吹きくるは南の風かくろぐると土現れて三月まぶし
おたがいにも頷くように見つめ合い首筋キツと上げたり鳥は
白銀のいただきよりも白き帯点と細りて消えてゆきたり
太陽も星座の空も澄みおれよ帰るしら鳥迷わぬように
会い別れ繰り返しつづき生きている人とう定め鳥とう定め
辞書になき「北帰行」の息衝く地わがふるさとに春は切なし

菊地栄子

黒猫

・ 海

「足許に氣を付けて」と若き母声掛け手を引きバス降りゆきぬ
バス停に腰を振らせ睥睨すまだ暮れ残る歳末の空
往く時の上り下りの坂道は帰りも同じ買物道
試みにストーブで焚きあげし新米は昨日の和いだひと日思わす
年玉を身内の子等にふるまいて正月二日やや晴れがまし
学校で騒ぎを起こし茶化してた子 メガネの顔の落ちつきを見よ
高齢を理由に救いの手を出さず 何処に行きし黒猫の仔は

草刈十郎

冬もみち

・ 世

成人の日の一日を姫君を気どりし娘らの一団のゆく
自転車で賀状を配る少年の吐く息白く顔りりしかり
凍りつきしごとく動かぬ雲ありて寒さむとして天地暮れゆく
おでん種さまざまあればこれそれあれグッドベターベストにつきる
湖に散りて浮くもの映るもの美しかりし冬もみちかな
いやなこと多かりし去年何もかも忘れてしたき初笑ひかな
戦後八十年戦争知らぬ古希と喜寿平和と続けいついつまでも

小林能子

いつかまた

・ 羊

寝返りもままならぬ日に内裏様も思ひ出も娘に預けて終ひぬ
七段飾り背中に宮詣着の暗れすがた父の写真も想ひ出の中
焼け跡に奇跡の御殿難われを忘れ拾ひし内裏様を抱きぬ
相馬焼くい呑みに甘酒愉しみてひっそり遊ぶ紙の夫婦雛
白椿白梅白きシクラメン幽かの視界とほくあかるむ
雲色の雲はふかふかジャンプしてまたも踏み外す 明け方の夢
いつかまた旅に出かけます地球号に私が帰る場のあるかぎり

河野繁子

向こう岸

・ 雁

誰ならん呼ぶ声のする向こう岸わたらず戻り今ある自分
生年月日まずちらと見て「まあ長生き」と看護師もらす
残りたる胃は三分の一小さくも命をつなぎカメラの検査
電子マネーの支払い便利コインなど製造止めれば予算の浮くと
九十代は置いとけばかりか世は変わり今の普通は我には異状
唐突にタイからラインの飛んで来て小さな頭は不思議がめぐる
彫刻を字ぶとタイにいる娘より寺院、花々わくわく見せる

近藤栄昭

湘南海岸

・ 虹

引き波に体傾く足元の砂さらわれて心さらわる
老人化つま先からも始まる靴下一枚通した感覚
湯加減を手でかき混ぜて確かめるやけど感じぬ老化の足うら
靴下を履けばくるぶし暖かい麻痺がなければ指先温いか
冬枯れの芝生を歩く足裏は陽の温もりに触れぬ老化は
湘南を裸足で歩く砂浜は皮を履きいる裸族になりて
感覚を一つ失う高齢化春の砂浜足跡のみに

近藤芳仙

如月寒き

・信

映像の海苔つややかに黒光り香り立ちたり 海風の吹く
稜線の日本海側けふらせて近付く吹雪 慣れて見定む
幾日も痰の切れざる咳をして夜半も眠れず老いを愁ふも
二週間咳止まざれば疑はれレントゲンもて見透かされをり
節分の鬼を片して難を出す病みつづ吾に時間の過ぎて
終日を病みし眼にながむればカーネーションの青色に疲るる
ランプもウクライナさへ想はざり苦しき咳の止まざる日は

坂上直美

仏蘭西紀行

・天

繊細なレエスのような雲の舞う仏蘭西の空郊外の村
集落のもっとも高き尖塔の頂の十字架朝日に光る
ひたすらに階段を登る言葉なくモンサンミッシェル神に近づく
異教徒は帰れというか風強しモンサンミッシェル長き橋上
ルーアンの雨の路上に座る人ただ黙然と投げ銭を待つ
久々に空見上げたりノルマンディー冬の星座の凍つる輝き
パリの街通りの見える窓近き席に座りて時の過ぎゆく

坂出裕子

満月

・洛

世が遠くなりゆく思ひコロナ禍の冬を久しく家に籠れば
もうすぐに春が来るよとささやいて梅の小枝のみどりかがやく
コロナ禍に閉ぢ込められてゐる日々を明るく照らす子からの電話
まっすぐに笛を天へかかげつつ春を待ちをり花の花木が
たがふなく春は来るらし花木つぼみ日毎にふくらみゆけば
腐葉土を撒きて育てし山茶花が満開の紅 土に散らせる
もう一度月を見むとて満月の見ゆる東の雨戸開けおく

佐藤道子

異変

・甲

山茶花が押し合ひ止し合ひ咲く師走枯ねばよいかと思へる程に
銀杏が生り過ぎて枝が折れしとふ昇過ぎし夏漸く終る
この夏に茂り過ぎしか冬の朝掃いても掃いても落葉が積もる
サマローズ一面に咲くテレビ見つ冷たき風の吹く一月に
冬至より更に夜明けが遅くなる朝の散歩に日は昇り来ず
ボールシフトしたかと思ふこの地球気象予報士何事もなく
六甲風吹く事なくて西風が冬の寒さを日毎運べる

篠原まり子

密やかな時

・羊

忘れ事多き日頃を癒されて勿忘草の花は水色
FMの夜のラジオを聴きし人ありと知りたる密やかな時
真夜に聴くカーペンターズを懐かしむ半世紀前の私になる
目覚めれば鈍き体をなだめつつ近くのパン屋に向かう慣わし
夕暮れは自らの巣に戻りたる小鳥が眠る夜の始まり
延焼す鎮火のめどは立たずして山林火災に雨待つ折り
矜持もつひとりの女に涙するそれぞれの生き方ありて後の死

柴田登志恵

明し

・天

ひかる風ガラスの天井吹きとほり明るむ大地爆発寸前
朝明けの光きらめく眠る山眠らぬ街も氷点下にある
暗がりに通勤の人置きしまま朝日は山をあたたためはじむ
豪雪のニュース聞きつつ微熱持つ身を横たふる午後雪明し
ふるさとはいまだ水原鴨の群れうすら雪降る海面たゆたふ
身をあふる西風潮の香をふふ二月の空は果てなく青き
朝ごとに酷しき言の葉聞こえ来ぬ地球の一点ワシントンより

鈴木結志

感情菩薩

・福

在りし日の妻との旅をふりかえり四国巡礼の思い出たる
高野切書を臨書してしかすがに紀貫之の心を宿す
哉、飢え、世紀を超えていつ知らず夢の夢なる白寿を迎う
わがうたをラベルに貼りし吟醸酒白寿祝いに歌友より給う
誕生日息子といただく吟醸酒この身に満ちて菩薩となりぬ
詩練り技言質に及ぶ語らいに真骨頂の一途に至る
湖にうつる名月に構想を得しという紫式部に習うた詠む

関根榮子

女難

・埼

たわいなき会話して来て後々に思ひいだせば貴重な会話か
連日の大雪の画面見ておりぬ立春過ぎて大寒波くる
烟道にひとむらありしと立ち寄るも今年は水仙の花芽のいまだ
忘れいし悔しきことの浮上する寝ざかにして何のはずみか
朝食の手を休めつつ見ておりぬ椿の蜜吸う目白が今日も
飾りたる木目込雛の内裏様女雛の豊かな髪とのえし
糸巻の小さを女雛の手に添えし五色の糸のほつれず流る

関根和美

きんなん

・埼

ふるさとに狸塚ありこの町に狐塚あり地名たのしも
きんなんの数粒ふくろにはじけたり電子レンジのありがたきかな
電線が唸りふるえる北風の強さにわれも首すくめたり
八百万の神いますこと畑野辺に群れ広がりて咲くホトケノザ
無住寺にありしはまことか梅に桃河津桜に枝だれもつづく
野焼するけむりは獨に夕暮れてモネの絵想うもいろいろの景
牛蛙まず消え田の消え草の生え知る農の家またひとつ消ゆ

高尾恭子

奈良道通

・大

水飴のような時間をさかのほり薬師如来の指先ひかる
水煙は光るともなく寒々し遠つ世あおく吾を揺らして
説法の席に固まる詰め襟のひと群れ普通の大人になるな
千本の木っ端になった観音の御手に救いの一線をさがす
とこしえに黙しつづける御仏の薄きくちびる本音をもらす
たましいを尊いかえして妻どいの牡鹿ひと声夕闇を裂く
天空に月のしずくを零しつづ今宵ひときわ夕星ひかる

高津砂千子

雪

・雪

降る雪に折り紙細工のように見え並ぶ家家ひそまりている
裸木に雪のつもりて白くみゆ近くにおれば美しからん
雪が雨に変わって続く一日よ傘の離せぬ如月なかば
電気屋のビルがかすめる雪の中あの街角を曲がりて来しが
傘を取りに引き返すひと二人あり雨は雪よりうっとうしいか
四階の病窓より見る白き界ただ一色の世界なりけり
雪のなか息子夫婦がお見舞いに来てくれ嬉し誰に告げんか

滝田靖子

氷柱

・新

それぞれのバス待つあはひしんと降り雪浴びてひとりひとり
軒先に溶けては氷るを繰り返す氷柱は冬の育てる牙
風邪に伏すひと日くしやみと鼻水と咳でちつものんびり出来ない
乾燥は喉鼻の敵と散散に言はれてゐたのにこの体たらく
風邪に伏すひと日はわたしの誕生日どうといふ事もないけれども
熱のある身体は生きてゐる証だとして顔に言ふ人のあり 笑止
これの世のものにあらざる冷たさに永遠を眠りゆくこと死とは

田 土 成 彦

時計

・宙

掛け時計少し狂ひて時を打つ午睡のあとのやうな體に身の回り電波時計に囲まれて秒も遠へず刻表示するお内裏も頸が外れる大あくびして暗闇の開かずのくしげ春雨と言ふほどの降り折りたたみ出さずに急ぐ家まで五分二十四引きのあんパン二つ買ひジュースを添へて今日の昼食春寒の夜のくたちに出る噫四つ続くは何の予兆か寒期あつあつ御飯に落とし食むウィーガンではないことの喜び

田 土 才 恵

『手話がある』から

・宙

突発性難聴の名に囚われし梅雨の始まり遠に過ぎ来て溜まりたる疲れの故か些細なる会話はならず難聴ゆえにおいおいに難聴薄れゆるるなか『手話がある』とう歌集の届く聴力に差を持つひとの生活を歌に知りたり歌集『手話がある』控えめに簡潔に届きしファックスの文章じんわり心にひびく悔しさも秘めたる歌の重たさを受け止め読まむ健常者われは電話して用足さぬことファックスを受けて気付けり健常者ゆえ

玉 井 綾 子

ルール

・羊

多様性認めぬルールの中学校 大人になる為の準備として時間割、席、服装が決められて友達教室の範囲内学校が檻だったから昭和には校内暴力、今は不登校鼻はすぐ異臭に慣れる 不登校二十日目にする欠席連絡おかわりはせずじゃがりこを食べる子をつまらないテレビを眺む怪過ぎの車内に眠る制服の女子 参考書と鉛筆持ちて本を手に寝落ち気付けば降りる駅、眠れた得と読めなかつた損

中 島 央 子

花

・森

北の風襟に冷たき朝の路紅さし初めし梅の花咲く少しづつ日の長くなり花摘みにつみ来しストック抱へて帰る満月の窓にカーテン引き寄せて暫し見上ぐる静寂の影遠き日に旅せしマウイの星空ツアー思ひ出させる如月十日締切の迫れる確定申告書娘を煩はす医療費その他わが家の近くの銭湯三軒が空地となりて冬の陽乾く過ぎゆるける一生短く長くして桜花咲く時をひたすらに待つ

永 田 進 一

白鷺

・山

白鷺は番となりて舞いおりぬ君にも春の訪れたるかウクライナに『進撃の巨人』とう漫画読む少年少女よ生き抜き給え大殺戮五十万羽の殺処分鳥インフルエンザの凄まじき日々TOTOの便器部分は製造終了丸ごと買い換え迫らる不便さAIが世界変えるか人間の性そのままに受け継ぐのかも二・二六事件告げし人へ説く齋藤史の歌読むべしと大部会はいつもとどこかで工事中健康保つ人間に同じ

永 塚 節 子

苛苛苛

・銀

もしやこれTEPCOの間違えさにあらず廻りに増えたる電化製品レジスターのはじき出したる金額に物価高きを思い知らさる治りたるあかぎれまたもばっくりと傷というはこういうものらし二月半ば桜の季には早けれど小さな町に訪う人多しはやばやと色見せ初むる河津桜に容赦はあらず明日は雪らし桜咲く季となれども凍てつける会談なりき 戦さ終らず指先を使えぬことにいらいと終りの見えぬ戦さのさ中

藤田美智子

作見の井戸

・新

ふるさとを捨てさせられし人たちを語らずなりて雪の降り積む
「震災はママのおなかにゐた時」と思春期ただなかの少女は語る
飯館の作見の井戸の濁れたるを投稿葉書に知らせてきたり
「ふるさと珠洲に帰りたい」珠洲は太熊にも浪江にもなる
汚されし土あまた残されることをすつかり忘れ春に浮かれる
失ひしふるさとを語る人のをらずなりたり聞く人のなく
震災を原発をまだ詠ふのかへまだ」とますますに向き合へずある

藤森巳行

裸木

・銀

裸木は春の芽吹きを秘めて立つただひたすらに北風に耐へ
寒風にひとり立ちたる裸木は春の芽吹きを生命に宿して
上京の我に重なる裸木よ明日芽吹けよ未来に花咲け

人生の始発駅なり松本は十八の春社会へ旅立つ

生きてゐる八代亜紀にはもう会へぬ映るテレビに涙が落ちる

健さんの肩で風切る任侠道憧れし我二十歳の青春

義理人情大事に人生生きてきた令和の時代絶滅危機種

本元由美子

三年目の春

・関

向日葵の黄と空の青を国旗に持つ国の闘ひは止まぬ三年目の春
春の日の厨の窓辺に玻璃の瓶義山の杯の明るむあした
風温む啓蛰の畑に野良仕事獣も鳥もさあ、出でて来よ
弥生の風に酸味の緩むゆずの実をめあてに群れる猿と鶴
竹藪の伐りたる竹を燃やしたきが岩手を想ひ野火を慎む
東風ふきて何処ともなく匂ひ来る香に誘はれて沈丁花切る
水仙と沈丁花を切り供花にする弥生三日は妣の誕生日

久我田鶴子

生命

・羊

産んだこと育てたことも消し去られ生命といふが時にあらがふ
みづからの齡といふにおどろきてけふは笑へり母九十四
別人にされた義母はつまらなさう花に埋もる最期なんてさ
ぐつしよりと濡れてバジャマなんて顔をしてゐたオカアサンあなたは
ささやかなことにも詫げる友とゐた最後となつた友とのその日
死臭かすか気づくにはやく友の部屋それには触れず死を受け容れぬ
名を呼べばまだ生きてたと返してくるコロナの日々のつづきの夜を

● 地中海叢書・新刊案内 ●

- ・藤井瀧江遺歌集「風の坂道」(第954篇) 九曜書林
 - ・石田明彦歌集「ロードノイズ」(第955篇) 九曜書林
 - ・泉嘉穂子歌集「石見神楽」(第956篇) ながらみ書房
 - ・中山真弓歌集「空色のママチャリ」(第957篇) 九曜書林
 - ・牧 雄彦歌文集「メコン渺々」(第958篇) しよく出版
 - ・久我田鶴子著「冬潮を航く―三好直太の歌」(第962篇) 六花書林
- 〔近刊〕
- ・御代田澄江歌集「花の小夜曲」(第959篇) ながらみ書房
 - ・若松喜子歌集「文鎮」(仮題) (第960篇) ながらみ書房
 - ・久我田鶴子著「海に金鏈―わが短歌小史」(第961篇) 砂子屋書房
 - ・鈴木剛之歌集「安積春秋」(第963篇) 九曜書林

今日の二人

朝が来る

篠原 優沙

携帯で紛らわそうにも刻々と寄せる津波と化した名もなき想い
ただ一人何でもないと言ひ聞かせ部屋に響くは醜い鳴咽
止められぬひと度散ると咲き続く重い花びらしとしとと泣く
目を腫らし鏡に映る怪物は昨日とは違う鼻水小僧
滲む視野歯を磨いても前見えぬ家の雨雲晴れることなく
淡々と歌を詠んでは曇りへと想いの全て歌の糧へと
湯に入り緊張ほぐれる一息を歌もすらすら湧いてきている
泣けるゆえ隣人の手をすぐ取れるこの世にはもう泣き虫はおらず
無・悲しさ・虚しさ・怒りぐるぐるとまた思いが続く
猫はただいつも変わらず側にいて布団の中でそっと温める
ズキズキと眠り妨害目が覚めて葉飲んでも変わらない五時
朝が来る淡い温もり背に受けてトコトコ繋がる大学にまで
眠くても寝過ぎさないか気にしては車窓見ながら一句一句と詠む

歌を詠む

祖父母の影響で始めた短歌。小説とは違う表現方法に強い興味が湧いた。決まっている文字数に纏めるのはパズルのようだが、そのお蔭でより自然に目を向けられるようになった。昔はただ過ぎ去っていく景色の一部で、そこから何かを見出すことはなかった。短歌は季節の変わり目や感情など、ふと感じたことを記せる。小さい時に憧れていた、交換日記に似ているのかもしれない。この歳になってやっと行える。短歌は小説に昇華出来ない想いを詠める。面白いことに歌を詠んでいる時は小説が書けず、逆もまた然りである。前者は現実的な視点から詠み、後者は空想的な視点から記すからだろう。

始めた当初は文字数を合わせるのに苦勞していた。変な語尾や新しい言葉を生み出すこともあった。気づけば、その形に自然と収まるように詠んでいた。綺麗に嵌ればとても爽快で、そうでない時はとても重てこねくり回すことを繰り返す。これまでは想いや猫、学校生活についての歌を詠んだが、今回は感情の表現をいろいろ考えてみることにした。